

自己観と社会的行動に関する研究 (I)

松田君彦

(1999年10月15日 受理)

A STUDY ON THE RELATIONSHIP BETWEEN SELF AND SOCIAL BEHAVIOR

Kimihiko MATUDA

I 序 論

Markus & Kitayama (1991) や Triandis (1989) らは、自己認知の在り方の違いが社会的行動の文化差を生じさせると考えた研究を展開して注目されているが、木内 (1995) は、Markus & Kitayama (1991) が提唱した“独立的自己理解”，“相互依存的自己理解”という二つの自己理解が個人の中に両方形成され、それら二つの自己理解の相対的な優位性が社会的行動の個人差を生じさせるという仮説的モデルを検証するために「独立・相互依存的自己理解尺度」(SII)を作成し、さらに、木内 (1996) ではこのSIIを用いて、独立・相互依存的自己理解の特徴と諸パーソナリティ特性との関連性を検討している。

独立的自己理解とは、自己を他から切り離されたものと理解することであり、かつ、自己の中の誇るべき属性を見出し、表現していく主体と見ることである。こうした自己理解は、欧米の文化において典型的であると言われる。一方、相互依存的自己理解とは、自己を他の人々と根本的に結びついていると理解することであり、かつ、特定の他者との協調的でもちつもたれつとの関係を維持し、実現させていく主体と見ることである。こうした自己理解は日本を含む東洋の文化において多く見られるという (Markus & Kitayama, 1991)。

木内 (1995) では、SIIは一次元の尺度であり、項目分析の結果やその因子構造から、高い信頼性を有していること、また、集団主義尺度 (Yamaguchi, 1994)、独自性欲求尺度 (Snyder & Fromkin, 1980; 岡本, 1985)、公的自己意識尺度 (Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975; 押見・渡辺・石川, 1986) と有意な相関があり、概念的妥当性を備えていることが確認されている。さらに木内 (1996) では、対人不安、セルフ・モニタリング、性別アイデンティティ、自尊心、Locus of Controlといった諸パーソナリティ特性が検討され、Locus of Control以外の特性といずれも有意な相関が得られている。

上述のように、木内 (1995, 1996) では、個人内における相互依存的自己理解の相対的な優位性は公的自己意識の強さや対人不安傾向の強さと有意な関連性を示すものの、私的自己意識とは何の

関連性もないことが示された。つまり、公的自己意識とは他人から見られている自分を意識し、自己を社会的対象として意識しやすい傾向であることから、自己を社会的文脈と連結された共生的存在と捉える相互依存的自己理解を強く示す者は公的自己意識が強く、対人不安感も高いという予想通りの結果が得られたのである。しかし、菅原(1988)は公的自己意識の強さが高い対人不安傾向の条件になることは認めながらも、公的自己意識が強いからといって必ずしも対人不安が高いとは限らず、公的自己意識の強い者の一部が、なんらかの原因で高い対人不安傾向を示すようになるのであろうと述べ、その証拠として、公的自己意識は対人不安傾向と正の相関が認められたが、自己顕示欲求とも正の関連が認められたことを挙げている(菅原, 1984)。またこれを受けるような形で松尾・新井(1998)は児童を対象に、公的自己意識が強く、しかも対人的自己効力感が低い者が最も強い対人不安傾向を示すという研究結果を報告している。自己効力感とは、「対人的場面において適切な社会的行動を遂行することが、どの程度自分に可能かについての主観的な評価」と定義される特性である。また、松田・樺山(1998)の研究では、公的自己意識が強ければ私的自己意識の強弱とは無関係に対人不安は高くなるが、公的自己意識が弱い場合には、私的自己意識が強いほど対人不安の出現を抑制できる事が示された。公的自己意識と私的自己意識は相互に独立した二次元構造の意識内容であると仮定されている点を考慮すると、独立・相互依存的自己理解と公的自己意識・私的自己意識との関連性についてはさらに検討してみる必要があると思われる。

また、木内(1996)では予想に反した結果であったセルフ・モニタリングとの関連性についても再度、検討してみたい。セルフ・モニタリングとは、状況や他者の行動に基づいて、自己の表出行動や自己提示が社会的に適切なものであるか否かを判断し、自己の行動を制御することであるから、状況や他者の行動を重視しやすい相互依存的な自己理解傾向とは当然ながら正の関連性が予想される場所である。

Ⅱ 本 研 究

【目 的】

松田・樺山(1998)では、対人不安傾向の現れに対しては、私的自己意識と公的自己意識の二要因の間に交互作用が認められ、公的自己意識が弱い場合にのみ私的自己の働きが顕在化して対人不安傾向を抑制するという結果が得られた。つまり、対人不安という心理現象に対しては、同じ自己意識でも公的自己意識の方が中心的な影響力をもつものに対して、私的自己意識は二次的な抑制機能を果たすということが明らかになった。一方、木内(1995)では、独立・相互依存的自己理解と私的自己意識・公的自己意識の関連性をそれぞれ相関係数で調べた結果、公的自己意識との間のみ正の相関が得られ、予想されていた私的自己意識との間の負の相関は見られなかった。さらには、二要因が交互作用的に独立・相互依存的自己理解と関わっている可能性も考えられる。木内(1995)とは違った方法を用いて独立・相互依存的自己理解と私的自己意識・公的自己意識の関連性検討してみることが本研究の第一の目的である。

また、木内（1996）では、独立・相互依存的自己理解とセルフ・モニタリングとの間に予想とは逆の相関が見られた。この両概念の定義内容からすれば当然、相互依存的な自己理解の傾向が強いほどセルフ・モニタリングと正の相関関係が予想されるところであるが結果的には逆であった。両者の関係を再度検討してみることがこの研究の第二の目的である。

研究を進めるにあたって、基本的には次のような仮説を立てた。

- (1) 私的自己意識が強い者は、他者の評価よりも自分の内的世界の一貫性を重視し、また自分自身をより正確に認知できるので、独立的自己理解が優勢であろう。
- (2) 公的自己意識が強い者は、他者から見られる自己を強く意識しその評価を気にする傾向が強いことから、相互協調的自己理解が優勢であろう。
- (3) セルフ・モニタリングが強ければ相互依存的自己理解が優勢であろうし、セルフ・モニタリングが弱ければ独立的自己理解が優勢であろう。
- (4) 公的自己意識が強ければセルフ・モニタリングが強くなり、私的自己意識が強ければセルフ・モニタリングが弱くなるであろう。

【方法】

1. 調査対象：鹿児島大学学生 242名（男性 94名，女性 148名）
2. 調査期日：平成10年11月～12月
3. 調査材料

- 1) 独立・相互協調的自己理解：木内（1995）が作成した独立・相互依存的自己理解尺度（SII）尺度をもちいた。この尺度は16項目から構成され、回答様式は「Aにぴったりと当てはまる」に4点、「どちらかといえばA」に3点、「どちらかといえばB」に2点、「Bにぴったりと当てはまる」に1点を与える4件法である。Aが相互協調的自己理解の項目であり、Bが独立的自己理解に関する項目である。つまり、高得点であるほど相互協調的自己理解が優性であり、得点が低いほど独立的自己理解が優勢であることを意味している。
- 2) セルフ・モニタリング：Snyder（1974）のSelf-Monitoring Scaleの翻訳版を用いた。この尺度は、演技性尺度5項目、他者指向性尺度11項目、外向性尺度6項目という三つの下位尺度から構成されており、回答形式は「よく当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの5件法である。
- 3) 私的自己意識・公的自己意識：Fenigstein, Scheier & Buss（1975）のSelf-Consciousness Scaleの翻訳版（菅原，1984）を用いた。これは私的自己意識尺度10項目、公的自己意識尺度7項目の、計17項目から構成される二次元の尺度であり、回答様式は「よく当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの5件法である。

【結果】

1. SIIとセルフ・モニタリング（全項目）、私的自己意識、公的自己意識との関係
セルフ・モニタリングの全項目得点、私的自己意識得点、公的自己意識得点のそれぞれを四部領

域で分け、上位25%をH群、下位25%をL群とし、各H群、L群ごとにSII得点の平均値および標準偏差を求めたのがTable 1-1である。

Table 1-1 SII得点の平均と標準偏差

	H 群	L 群
セルフ・モニタリング	38.07 (6.78)	44.91 (4.83)
私的自己意識	38.80 (4.99)	44.18 (7.31)
公的自己意識	42.68 (4.63)	38.87 (7.19)

Table 1-1の結果に基づいて3要因の分散分析を行った結果をTable 1-2に示す。分析の結果、私的自己意識のH群とL群の間に5%水準で主効果が見られた($F=4.660$, $df=1/34$, $p<.05$)。また、セルフ・モニタリングと公的自己意識の間に5%の交互作用が見られた($F=6.027$, $df=1/34$, $p<.05$)。そこで単純主効果検定を行ったところ、公的自己意識L群においては、セルフ・モニタリングH群とL群の間に0.1%水準で有意差がみられた($F=26.467$, $df=1/34$, $p<.001$)。セルフ・モニタリングH群においては、公的自己意識H群とL群の間に0.1%水準で有意差がみられた($F=39.731$, $df=1/34$, $p<.001$)。つまり、私的自己意識が低いほど相互依存的自己理解が優勢であること。また、公的自己意識が低い群では、セルフ・モニタリングが弱いほど相互依存的自己理解が優勢であり、セルフ・モニタリングが強い群では、公的自己意識の強い群の方が弱い群よりも相互依存的自己理解委が優勢あるということがいえる。

Table 1-2 SII得点の分散分析表

動 因	平方和(SS)	自由度(df)	平均平方(MS)	F 値
A:セルフ・モニタリング	185.765	1	185.765	7.552 **
B:私的自己意識	114.637	1	114.637	4.660 *
AB	33.157	1	33.157	1.348
C:公的自己意識	295.551	1	295.551	12.015 **
AC	148.268	1	148.268	6.027 *
BC	36.268	1	36.268	1.475
ABC	68.735	1	68.735	2.794
誤差	836.383	34	24.600	
全体	1718.784 ** $p>.01$	41 * $p>.05$	907.001	35.871

2. SII得点とセルフ・モニタリングの下位尺度、私的自己意識、公的自己意識との関係

セルフ・モニタリング尺度は「演技性尺度」、「他者志向性尺度」、「外向性尺度」という三つの下位尺度から構成されている。以下に、その各尺度毎に同様の分析を行った。

1) 演技性尺度について

演技性尺度の得点、私的自己意識得点、公的自己意識得点のそれぞれを四部領域で分け、上

位25%をH群，下位25%をL群とし，各二群間ごとにSII得点の平均値および標準偏差を求めたものがTable 2-1である。

Table 2-1 SII得点の平均および標準偏差

	H 群	L 群
セルフ・モニタリング (演技性)	38.33 (7.30)	43.61 (6.07)
私的自己意識	41.69 (6.66)	40.22 (7.86)
公的自己意識	43.12 (6.43)	38.42 (7.27)

Table 2-1に基づいて三要因の分散分析を行った結果がTable 2-2である。演技性因子と公的自己意識の間の交互作用が有意な傾向 ($F=3.441$, $df=1/36$, $p<.10$) にあったので下位検定を行ったところ，公的自己意識L群においては，演技性得点のH群とL群の間に0.1%水準で有意差がみられ ($F=18.929$, $df=1/36$, $p<.001$)，演技性得点H群においては，公的自己意識H群とL群の間に0.1%で有意差がみられた ($F=30.611$, $df=1/36$, $p<.001$)。また，私的自己意識と公的自己意識の間には5%水準で有意な交互作用がみられた ($f=4.403$, $df=1/36$, $p<.05$) のでここでも下位検定を行ったところ，公的自己意識H群においては，私的自己意識のH群とL群の間に5%水準で有意差がみられ ($F=4.725$, $df=1/36$, $p<.05$)，私的自己意識L群においては，公的自己意識H群とL群の間に1%水準で有意差がみられた ($F=13.882$, $df=1/36$, $p<.01$)。

Table 2-2 SII得点の分散分析表

動 因	平方和(SS)	自由度(df)	平均平方(MS)	F 値
A：セルフ・モニタリング (演技性)	189.731	1	189.731	5.910*
B：私的自己意識	38.859	1	38.859	1.210
AB	29.784	1	29.784	.928
C：公的自己意識	388.677	1	388.677	12.107**
AC	110.479	1	110.479	3.441+
BC	141.351	1	141.351	4.403*
ABC	3.233	1	3.233	.101
誤差	1155.746	36	32.104	
全体	2057.86	43	934.218	28.1
	** $p<.01$	* $p<.05$	+ $p<.10$	

つまり，公的自己意識と演技性因子が独立・相互依存的自己理解に及ぼす影響についていえば，公的自己意識が弱い群では，演技性因子が弱い方が相互依存的自己理解が優勢であること，また，演技性因子が強い群では，公的自己意識が強いほど相互依存的自己理解が優勢であるという交互作用がみられた。一方，私的自己意識と公的自己意識が独立・相互依存的自己理解に及ぼす影響についていえば，公的自己意識が強い群においては，私的自己意識が弱い方が相互依存的自己意識が優勢であり，私的自己意識が弱い群においては，公的自己意識が強い方が相互依存的自己理解が優勢

であるといえる。

2) 他者志向性尺度について

他者志向性因子, 私的自己意識, 公的自己意識の各得点を四部領域で分け, 上位25%をH群, 下位25%をL群とし, 各変数の上位群, 下位群ごとのSII得点の平均値および標準偏差を求めたものがTable 3-1である。

Table 3-1 SII得点の平均および標準偏差

	H 群	L 群
セルフ・モニタリング (他者志向性)	44.67 (5.41)	38.13 (6.66)
私的自己意識	41.09 (6.11)	44.75 (7.58)
公的自己意識	43.54 (6.29)	37.94 (6.46)

Table 3-1に基づいて三要因の分散分析を行った結果がTable 3-2である。公的自己意識の主効果が有意傾向を示した以外には, 何の有意差もみられなかった。つまり, 公的自己意識が強い群の方が弱い群よりも相互依存的自己理解が優勢であるという傾向が示されただけであった。

Table 3-2 SII得点の分散分析表

動 因	平方和(SS)	自由度(df)	平均平方(MS)	F 値
A: セルフ・モニタリング (他者志向性)	87.774	1	87.774	2.416
B: 私的自己意識	50.012	1	50.012	1.377
AB	41.828	1	41.828	1.151
C: 公的自己意識	127.757	1	127.757	3.157 ⁺
AC	37.269	1	37.269	1.026
BC	81.110	1	81.110	2.233
ABC	.442	1	.442	.012
誤差	1307.750	36	36.326	
全体	1733.942	43	462.518	11.372

+p < .10

3) 外向性下位尺度について

外向性因子, 私的自己意識, 公的自己意識の各得点を四部領域で分け, 上位25%をH群, 下位25%をL群として各変数のH群・L群毎の平均値と標準偏差を求めたものがTable 4-1である。

Table 4-1 SII得点の平均と標準偏差

	H 群	L 群
セルフ・モニタリング (外向性)	38.92 (7.34)	43.67 (6.02)
私的自己意識	41.61 (6.57)	39.47 (7.97)
公的自己意識	43.00 (6.05)	38.16 (7.62)

Table 4-1 に基づいて三要因による分散分析を行った結果を示したのが Table 4-2 である。外向性因子と公的自己意識でそれぞれ有意な主効果がみられた。外向性が弱い者ほど、また、公的自己意識が強いほど相互依存的な自己理解が優勢であるという結果であるという結果であった。

Table 4-2 SII 得点の分散分析表

動 因	平方和(SS)	自由度(df)	平均平方(MS)	F 値
A：セルフ・モニタリング (外向性)	219.239	1	219.239	6.354*
B：私的自己意識	101.457	1	101.457	2.940
AB	19.261	1	19.261	.558
C：公的自己意識	292.201	1	292.201	6.469**
AC	139.879	1	136.879	3.967+
BC	21.984	1	21.984	.637
誤差	1138.625	33	34.504	
全体	2010.400	39	54.549	20.925
	**p<.01	*p<.05	+ p<.10	

【考 察】

Fig. 1-1 から分かるように、私的自己意識の高低が独立・相互依存的自己理解の在り方に影響

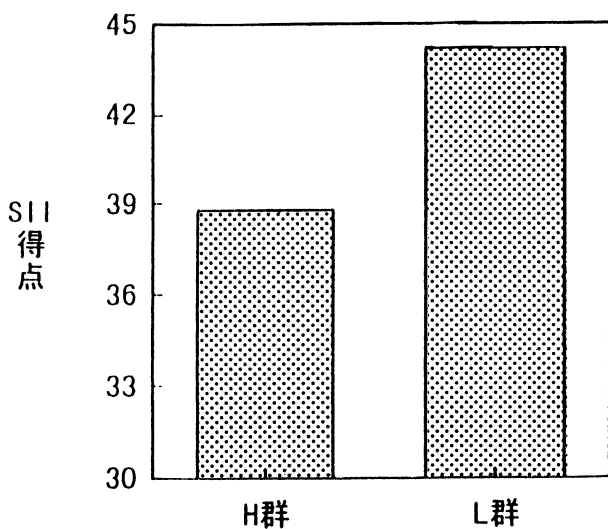


Fig. 1-1 私的自己意識と SII 得点

を与える。木内（1995）の相関的研究ではその関連性がみられなかった二つの変数の間に、ここでははっきりと関係が示された。つまり、私的自己意識が高ければ独立的自己理解が優勢であり、私的自己意識が低ければ相互依存的自己理解が優勢となるという、当然予想される結果が現れたということである。木内（1995）と違った結果が得られた理由として考えられるは、第一に前者が相関係数で両変数間の関連性を分析したのに対して本研究では分散分析という方法を用いたこと。そして第二には、私的自己意識・公的自己意識を測定するために用いた尺度

が異なることである。両尺度とも Fenigstein, Scheier & Buss（1975）を母体にはしているが、木内（1995）が用いたのはその改訂版である押見・渡辺・石川（1986）であり、本研究で用いられたのは菅原による改訂版（1984）である。いずれにしろ、以上のことから仮説(1)は支持されたといえる。

Fig. 1-2 は SII 得点におよぼすセルフ・モニタリングと公的自己意識の影響を表したものであるが、見て分かるようにここでは交互作用が認められる。つまり、セルフ・モニタリングが高い群にあっては、公的自己意識が高ければ相互依存的自己理解が優勢であり、逆に公的自己意識が低ければ独立的自己理解が優勢となるという結果である。一方、公的自己意識を基準にしてみると、

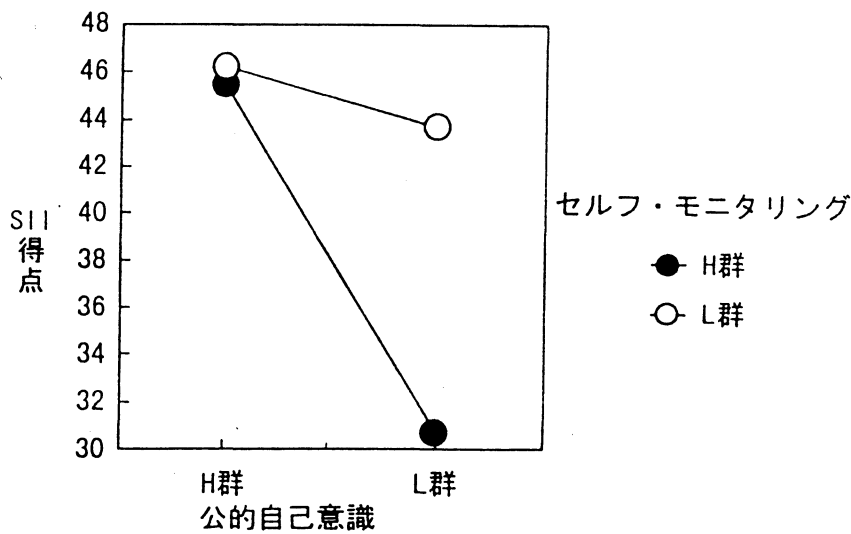


Fig. 1-2 セルフ・モニタリングおよび公的自己意識とSII得点

公的自己意識が高い場合にはセルフ・モニタリングの高低にかかわらず、相互依存的自己理解が優勢であるが、公的自己意識が低い場合にはセルフ・モニタリングが低い方が相互依存的自己理解が優勢であり、セルフ・モニタリングが高いほど独立的自己理解が優勢である。この結果は、木内 (1995, 1996) とほぼ

同じである。公的自己意識に関しては仮説(2)が支持されたことになるがセルフ・モニタリングに関する仮説(3)は支持されず、やはり木内 (1996) と同様に逆の結果が得られた。

木内 (1996) はセルフ・モニタリング尺度を構成する演技性、他者志向性、外向性という三つの下位因子に関しても分析を行っているので、本研究でも同様な分析を実施した。

Fig. 2-1 はSII得点に及ぼすセルフ・モニタリング (演技性因子) と公的自己意識の影響を図示したものである。演技性とは、自分が他者に与える印象を操作する能力である定義されているが、見て分かるようにトータルとしてのセルフ・モニタリングを指標とした場合と同様の交互作用が認められた。つまり、演技性因子を基準に分析してみると、演技性得点が高い場合には公的自己意識

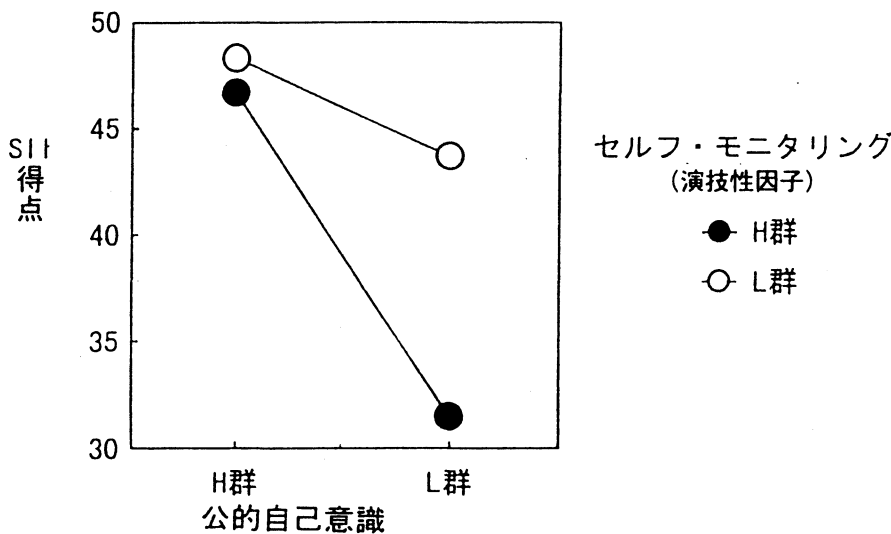


Fig. 2-1 セルフ・モニタリング (演技性因子) および公的自己意識とSII得点

が高ければ相互依存的自己理解が優勢であり、逆に公的自己意識が低ければ独立的自己理解が優勢となるという結果である。演技性得点が高い場合には公的自己意識の高低によるSII得点には差がみられない。次に公的自己意識を基準に分析してみると、公的自己意識が高い場合には演技性得点の高低による差は認め

